

崩れていくのを見ている。それで、信玄堤は日本の技術がいつ頃までどういう経歴でこういうふうになってきたか、そして、西洋から入ってきた土木技術に置き換わって行って、今どうなっているかという事を、勝手に自分で勉強して調べています。

たとえば、去年の12月の25日に起こった、JR羽越線の脱線事故です。実は一昨日も現場に行ってみてきました。庄内平野でものすごく風のきつい所だというふうに言われている所です。ですから、僕は東京にいて、風がきついから、きっと風力発電をやっているに違いないと思っていました。そうしたら、それは当たっていました。ところが、風が強いというのが、全然違うのです。向きが違います。日本海側から吹いてくる風は西風で、これを使って、日本で最大の風力発電所が酒田にあります。一基2000キロワットというので、ものすごく大きな風力発電が動いていますが、これは主に冬です。それからさかさまの側に立川という所があります。これは地方自治体として初めて、風力発電所を作ったところですが、そこへ行ってみると、一基200キロワットの風力発電が何基も動いていますが、この使っている風は春から秋にかけての東風でした。こういう事を何も知らないと庄内平野は風がきついところだというレッテルを貼って、みんなで考えてしまうけど、行ってみると全然違う。脱線現場である余目へ行ってみたら、その辺の人たちは、ここは風の静かなところですよと言っています。ビニールハウスがいっぱい立っていて、花き栽培などいろいろな栽培をやっていますが、仮に風だけ強いのであれば、こんなものできるわけありません。だから、報道やものを考える場合、現場にいかないで、ステレオタイプでものを言うのは、みんなダメだというものの例です。

これは、僕が先ほど言った、日本海側ですごく変な気象が今起こり始めている事に気がついているので、ああ羽越線だったら変なことが起こったなと思っているのですが、たぶんあれは竜巻です。それで、全く余地不能なものが出来ていて、防風林を超えて、10キロくらい突っ走っているのです。直径がたぶん5メートルか10メートルくらいの竜巻が起こっています。一昨日行って、最後に階段の所まで行って見たのですが、直線的に全部が走っているのですが、間欠的にものを破壊しています。日本は、

本当の竜巻の研究ってたぶんやっていないのではないかなと思うけれど、アメリカでやっているようなトルネードのようなでっかいものをやっているのではダメで、もっと小型で局所的に起こる風の研究のような事をやらないと全然やりようがない。ここに居る人たちは、実は脱線現場の反対の所にいるのですが、作業小屋が突風で全部たたきつけられた後なのです。これは事故が起こってから3週間目に行ったものですから、まだ片づけてなくて、ここでは持ち主が案内してくれたので、いろいろ議論をしてきました。

それで結局ですね、竜巻による被害状況ではクロマツが倒れる、ビニールハウス倒壊、暴風柵飛散、作業小屋倒壊、屋根瓦飛散、ビニールハウス倒壊というふう順番にいろいろなものが吹っ飛んでいます。これを後から見ると、もの見事に何か突風が通ったというのがわかるのですが、これから後、半年後になってから、同じ場所の同じ所を、全く違う半導体の製造工場のユーティリティが、こういう面情報をきっちり持っているのです。その情報を半年前までたぐって見せてもらったなら、あっと驚く。脱線現場のところで、もの見事に同じ時刻に落雷が起こっています。つまり、産業が全く違うところでは、東北地方の面情報をリアルタイムでウオッチしているのです。そういうふうにしなないと半導体が作れないから。しかし、鉄道会社はこういうものが必要な事を、気がついていないし、わかっていないから、全く予知できません。ですから、鉄道の会社にとっては、未知の事が起こったわけ。しかし、半導体の工場にとっては、既知の事だったのです。こういうふう

